大規模水稲経営の実践で担い手育成へ

氏　名：横田（よこた）　和希（かずき）

所在地：双葉郡広野町

【広野町の避難指示解除状況】
・平成 23 年 9 月　町内全域の緊急時避難準備区域が解除

【プロフィール】
　地域の水田を借り受け、若手農家の中核として大規模に水稲を栽培。平成 29 年の水稲作付面積は 24ha で、広野町で最大規模。認定農業者。広野町農業委員。

【震災前の経営と避難状況】
　震災前、横田さんは水田 1ha 所有の兼業農家で、高齢化や後継者不足で営農を諦めた農家からの農地を借り、水稲 8ha（主食用米 5ha、飼料用米 3ha）を作付。主食用米の品種はミルキークィーン 7 割、コシヒカリ 3 割。当時の販売先は、主に神奈川県厚木市内の幼稚園と静岡県伊東市内の道の駅。幼稚園は父親の知人が経営しており、道の駅は伊東市と広野町が姉妹都市だったことが縁で販売。

　原発事故により、いわき市内に避難し、しばらく知り合いの水稲農家の農作業を手伝っていました。農家は 30ha の大規模水稲農家で、横田さんは、「自分の将来の農業経営について、じっくり考えることができた」と当時を振り返ってくれました。

【営農再開のきっかけ】
　横田さんは、平成 23 年夏から広野町農作業受委託組合の組合員として除草作業などにより農地を管理していました。

　広野町は、平成 23 年の水稲作付を中止しましたが、翌平成 24 年に町内 40 か所（10a×40 筆）で、放射性物質吸収抑制効果の実証栽培を行いました。横田さんは、「本当に放射性物質が出ないかを、自分の目で確かめたかった。」として、町の実証栽培とは別に、自身で水稲を作付けしました。

【取組の内容】
　平成 24 年の作付面積は、用水が容易に手当できる範囲に限ったため、震災前の半分の 4ha に留まりました。4ha 全てコシヒカリを作付けしましたが、１年間の休耕による雑草の鋤き込みで地力が高まっていたためか、ほとんどのほ場で倒伏してしまい、収穫作業に影響がでてしまいました。放射性物質吸収抑制のためのカリ質肥料施肥については、当初はその効果を心配していましたが、検査で全て基準値を下回る結果が出たことで、「広野町で水稲栽培を続けられる。」との想いを強

くしたそうです。この年収穫したコメは、いわき市内の米穀店に全量を販売することができました。

横田和希さん（広野町提供）

水稲の栽培面積は、平成 25 年に 8ha と震災前の規模に戻り、平成 26 年は 12ha に、さらに平成 27 年には 24ha にまで拡大し、広野町内で最大規模の水稲作付農家となりました。その後は、平成 28、29 年と水稲 24ha の作付規模を維持しています。

品種は、平成 24 年にコシヒカリが倒伏したことを教訓に平成 26 年は「天のつぶ」に全面的に切り替えました。さらに、平成 27 年は、主食用米は刈取適期の異なる品種（天のつぶ、コシヒカリ、ひとめぼれ）と飼料用米「ゆめあおば」を作付けることにより、収穫作業の競合を避けることができました。

平成 29 年は主食用米 3 品種 15ha（天のつぶ 5.5ha、ひとめぼれ 5.5ha、コシヒカリ 4ha）、飼料用米 3 品種 9ha（もちだわら、あきだわら、ふくひびき）を作付けし、水稲以外に小麦を 2ha 作付けしています。

水稲の出荷先は、平成 25 年から全量を JA に切り換え、大規模な米生産に専念できる環境を整えています。また、平成 27 年から、町の「ふるさと納税」の返礼品として町内産コシヒカリが使用されており、その一部として、平成 29 年は約 1.5 ﾄﾝ（30kg×50 袋）を提供しました。

大型トラクターでの秋耕

【機械・施設の整備、雇用】

水稲用の機械については、平成 25 年にトラクタ 1 台、乾燥調製機械一式、平成 26 年にコンバイン 1 台、乾燥機 1 台（追加）、色彩選別機、平成 27 年にトラクタ 1 台、平成 29 年に田植機 1 台、色彩選別機（更新）と、順次整備しました。トラクタ及びコンバインは農業近代化資金を、田植機は原子力被災 12 市町村農業者支援事業を活用し、その他は自己資金で対応しました。

雇用労働として、トラクタオペレーター、除草作業及び収穫作業で年間 100 人・日を雇用しています。

コンバインによる収穫作業（広野町提供）

【課　題】

イノシシの増加により、食害、倒伏、畦畔損傷などの獣害が増大しています。対策として、山際のほ場を中心に電気柵を設置したり、崩れた畦畔を自らバックホーで修復していますが、共に多くの労力を要していることが課題となっています。

また、特定農作業受委託により農地を借り受けていますが、該当の貸し手農家が25名にも達していることから、賃料の納入などの事務手続きにも多くの時間を要しています。

【目標・将来構想】

広野町内では、後継者が少なく、担い手不足となっているのが現状です。横田さんは、「自分がやらないと広野町の農業が成り立たない」との気概をもって毎日の農作業に取り組んでいます。“儲かる農業”を実践することにより、「共に働く担い手を育成し、将来は営農の一部を任せられる人材を育てるのが夢」と話してくれました。

経営規模は、機械装備を考えると現在の 24ha 程度が適正な規模と考えていますが、平成 30 年から町内で農業基盤整備事業が予定されており、大区画化、ほ場の集約化が進めば、一層の低コスト化が実現できると考えています。

また、小麦は水稲に比べて大幅な省力で生産が可能であり、収穫もコンバインを併用できることから、「将来構想として、水稲 25ha＋小麦 25ha の農業経営を描いている」とのことです。

現在、福島稲作経営者会議の会員となり、全国の大規模な水稲農家と交流を深めています。水稲の栽培技術、資材調達などの情報を得ており、「これからも全国稲作経営者会議の全国的なネットワークを活用して、水稲大規模経営のノウハウを蓄積していきたい」と抱負を語ってくれました。

（平成 29 年 12 月）